

第4話

過去と向き合う

1

A Drop on the Palm 1



「とりあえず、いいわ。明日一緒に行きましょう」

「はい？」

「行きましようって言ったの。聞えなかった？」

「聞えはしましたが」

「じゃあ、明日駅でね」

なんだか、一緒に会社訪問をする羽目になっているんだけど。

あれ？　なんでこんなことになったんだっけ。

振り返ると、確かに伏線はあった。

* * *

朝、ご飯の支度したくをしていたとき話だ。

「優吾、ちょっと気になる会社があつて、内情を少しでも知りたいんだ。おまえの大学から何人か入社してると思うので、その『つて』を使って、会社内がどんな感じとか、聞けないか？」

「それ、前に言っていた話だよね？」

配膳の手を止め、兄さんに向き直る。

「そう、薬品を作っている会社でね。気になるんだ」

「気になる？　なんて会社？」

「十社製薬、ちよつと株価が面白い動きをしていてね。気になることは多いんだけど、人材を募集してないかという一点を、直接中の人に聞いて欲しい。情報収集だよ」

十社製薬。

確か、東京かどこかの製薬会社から独立して、近所に本社を構えているはずだ。

CMも深夜に何度か観たことがある。最近では風邪薬と花粉症の薬を出して、全国規模ではないみたいだけれどCMを打っていた。

会社紹介のCMを観て、近所にも製薬会社なんてあるんだと思ったので、たまたま覚えていた。でも、

「人材募集って、それだけ？」

兄さんのことだから、もっとすごいことを気にしているのかと思っただけだ。

「そう、それだけ。だけどこれはちゃんと会社に行つて、会社の中の人に聞いて欲しい。できるか？」

そう言われればこう答えるよね。

「できません」

「そうか、じゃあこれを使ってくれ」

差し出されたのは小さめのメモ帳。上下に開く感じになっていて、固定電話の横とかによく置かれているタイプのものだ。

「RHODIAのNo.12というメモパッドだよ。今後何か重要なことを聞く前にこれに『何を聞く』って書いてから聞いて、聞いたことをメモしてくれ」

「あ、はい。了解です」

メモの取り方まで指定とは、兄さんはなんかそういう変に几帳きちようめん面なところがあるな。

「ちよっと面倒かもしれないが。頼むな」

「はい、任せてください」

表紙は黒で少しだけ厚みはあるけど、小さいのでかさばるといってわけではない。

「今日明日がいいので、できれば早めになんとかしてもらえると助かる」

「はら」

「優吾、頼んだ」

「任せてください」

急ぎなら、まずは就職相談窓口のある学生課に行って聞くのがいいかな。今期も誰か入社するのが決まっているかも知れないし。

そんなわけで、学校に着くと一目散に学生課に飛び込み、事務の女性に声をかける。

「あの、就職課の方をお願いします」

その人はちらりとこちらを見て、

「学生さん？ 学年は？」

「一年の菊宮優吾と言います。文学部です」

「早いね。検討してる会社でもあるの？」

そう言うと、視線を落として書類を探し始めた。年齢は、おばさんとおばあさんの中間くらい。PCとか使わないのかな……。

「最近はどこも人手不足とか言っておきながら、目ぼしい人は大体三年で決まっちゃうからねえ。そんな話を聞くと、一年から焦るのも無理はないけど」

そういうと、女性は視線をこちらに戻す。

「で、どこの会社？」

「京都の製菓会社で、『十社製菓』っていうんですが……」

その名前を聞くと、感心したような表情になって、

「あら、つい先ほど聞いてきた子がいましたよ。それなら一緒に会社見学に行く？」

好都合だ。渡りに船とばかりに乗っかる。

「え、いいんですか。行きます。いつですか？」

「日付は明日ね。一四時に現地に行くことになってるから、詳しいことは一緒に行くこの学生さんに聞いて」

そう言うとき女性はメモ用紙にさらさらと何事か書いて、僕に渡した。

「一緒に行く学生さんの名前、学年と学科。あと部活も書いておいたからこれで探して」
そう言うとき立ち上がって、そのまま奥に引っ込んでしまった。

何か作業中に邪魔をしてしまったようなので、その続きに戻るのだろうか。

* * *

午前の授業が終わり、何はともあれ昼食を食べようと食堂に移動する。

貰ったメモには、先輩の名前が記されていた。生命医科学部の所属みたいだけど、別のキャンパスにあるので電車に乗らないといけない。

せめて昼を食べてからでないと、力も出ないからね。

日替わり定食を注文し、テーブルにつくと、斜め前のテーブルで何やら言い争いをしてる男女がいる。声がどんどん大きくなっていく。あまり関わり合いになりたくないんだけど、空いている場所があまりなかったので仕方がない。

「いただきます」

気にしないようにしてご飯を食べ始める。

今日の日替わり定食は、大根や人参などの根菜の煮物がメインだ。汁物と菜が一緒なのでどんぶりがでかい。

箸を動かしてもなかなか量が減らない。里芋やこんにやくも入ってるけど、どれもこれもが一切れが大きい。口いっぱいにはおぼりながら食べる。

これはちよつと失敗したかな、と思いつながら汁をすすっていると、揉めている男女の聲が、また大きくなってきた。こっちは確実に失敗したな……。

「だから、てしろぎ、だつてば！ あんた、ホントに知ってるの？」

「知ってる知ってる。トモダチだよトモダチ。てしろぎでしょ？」

「ほら、また間違つた！」

てしろぎ？ 兄さんのことを喋ってるのかな？ なんで？

珍しい苗字とはいえ、兄さん以外にいないことはないけど……。気になったので、音を立てずに食べながら聞き耳を立てる。こんな時、汁物だとすするだけでいいから都合がいいよな。失敗したか思つてごめんさい。

「ノムラにいた、なんてのはネットで調べれば簡単にわかることでしょう？ 最近の情報を知ってるっていうから、五万もあんなに出したのよ。しかも先月。あんた、一〇日でわかるって言うって何日経ってるかわかっているの？ その三倍の三〇日。正確にはあんた

があと一〇日くださいって言ってから三二日よ。口先だけなら耳を揃えて返しなさいよ！」
うわー。

なんというか……気の強い女の人だな……。

「いや、まだ調査中なんだよ」

でも……あれ？ この男の方の声……どっかで聞いたような？

「あんたみたいな若造が手代木様とトモダチなんて、どうせ嘘でしょ。孤高の人で通ってた彼に、そういうのがあるなんて、一瞬でも信じた私が馬鹿でした。もう信じません」

「もう少しだけ時間くれ、な？」

「もう待てないから」

そう言うのと彼女は立ち上がり、男の方にすつと手を伸ばして、

「すぐにお金を返して立ち去るか、私が学生課と教務部に訴えるか。どっちがいい？」

そして、指を二本立てる。

「三分あげるわ。決めなさい」

そう言うのと、もう片方の腕にはめた時計を見始めた。

普段は喧騒の中にある食堂も、彼女が立ち上がって言葉を発した時には視線が集まり、周りの人達が固唾をのんで見守っていた。

「そんなこと言うなよ、もうちょっと待ってくればわかるんだよ。なっ？」

その特徴のある声に覚えがあった。学食、会話、彼女……頭の中でパーツが重なって行く。

思い出した。思わず立ち上がりその男性を指さして、僕はこう言った。

『そんなの全く知らぬ存ぜぬで検索サイトの情報渡して金貰うさ』って言ってたんだ」
今度は周りの視線は僕に集まる。

「な、何言い出すんだガキイ！」

そう怒鳴り、つかつかとこちらに歩み寄ると……男はいきなり拳を振るった。

——あつ。

咄嗟とつさのことで何も防御も反応もできず、たった一発で食堂の床に転倒した。

頬が熱い——食堂の床に突っ伏した僕の意識は、そこで途切れた。

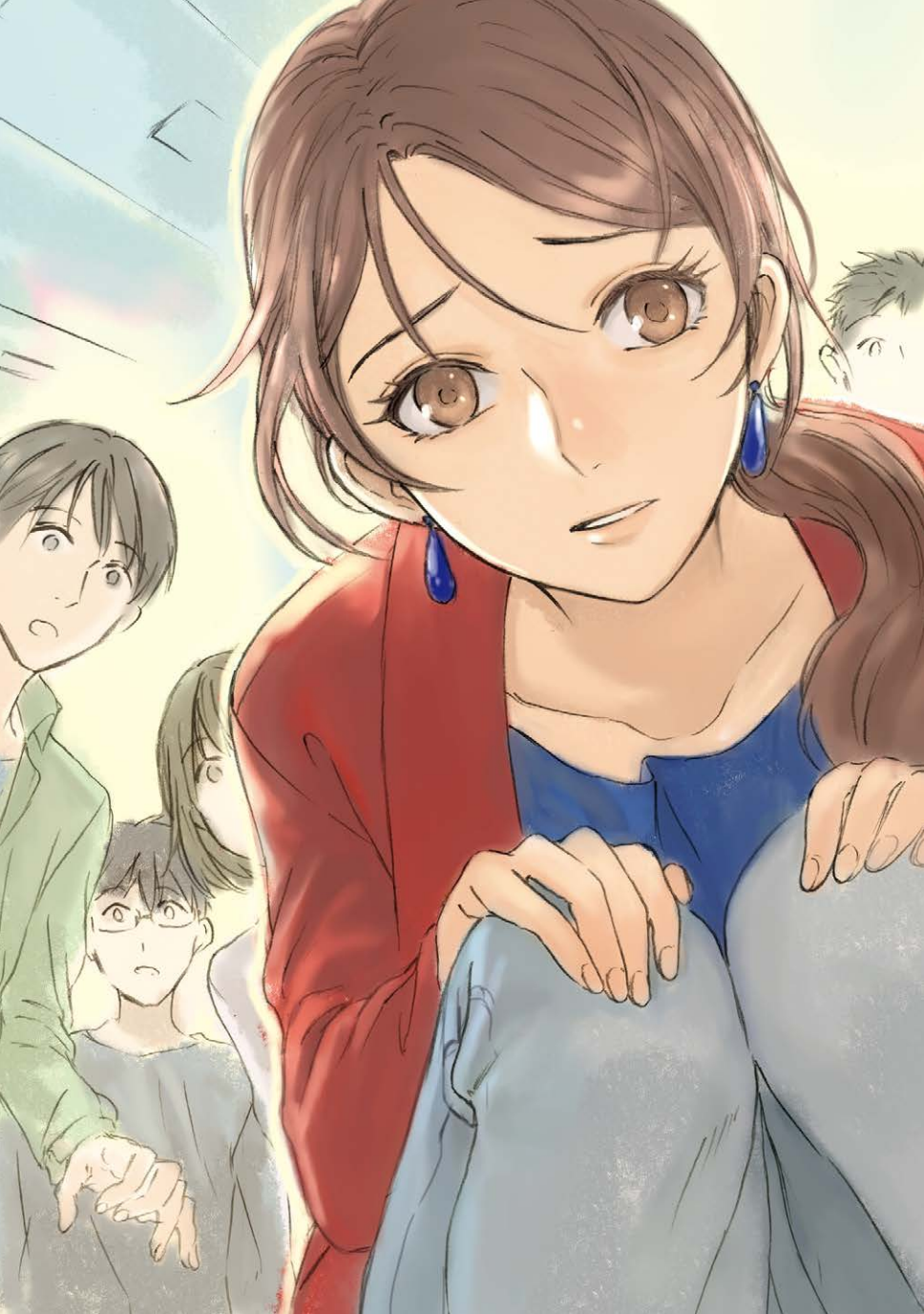
* * *

「大丈夫？」

殴られてから何分経ったのだろうか。女性の声で、僕は我に返った。

半身を起こすと、声をかけてくれたのは、先ほど言い争っていた女性のようだ。

大学の職員らしき人が、僕の腕を取って脈を取っている。何人か、その様子を遠巻きに見ている人たちもいた。



—そうか、ちょっと気絶してたのか……。

「大丈夫、だと思えます……」

「そう……」

そこで気がついた。

「あれ、あいつは？」

殴った人の姿が見当たらない。女性は腹を立てているようだ。

「あいつなら速攻で逃げたわ。ほんと、言い訳も選択も何もできない『くず』ね」
去って行ったであろう方角を睨んでいる。

「タンカあるけど、乗ってく？」

脈を取ってくれていた職員さんがそう言ってくれるが、ていちょう丁重に断った。

少々ふらついたが、なんとか起き上がって椅子に腰掛ける。職員さんはあんど安堵したのか去って行った。その後ろ姿をぼんやり見ていると、

「君、面白いね」

喧嘩をしていた女性が口を開いた。

「あ、いや」

会話の邪魔をしてしまったのだから、まずはそれを謝ろうと思った。

「すみません、会話を中断させてしまって……」

そう謝ると、

「いいのいいの。おかげで役に立たない奴だってわかったし。ちょっとお金は痛いけど、まあ授業料かな」

そう言って、少しづつが悪そうに微笑んだ。

「あの、確か手代木って言ってましたよね」

もしかしたら兄さんかも知れない。今の自分の怪我よりも何倍も気になることだ。

「聞えてた？ まあ大きい声だったからね」

「手代木……何さんを探してるんです？」

僕の勝手な思い込みで、他の手代木さんかも知れない。

「うん、手代木ってだけしかわかってないんだけど……私の憧れの人なんだ」

「憧れ、ですか……」

「子供の頃、ずっとネットばっかりしてたんだけど、その頃に見た手代木さんの発言がすごく印象に残ってるの。一度会って、どういう人なのか知りたくて」

会ったことはないのか。違う手代木さんかも知れない。

「……会ったことがないのに、憧れるんですか？」

「あはは、確かにおかしいよね。ネット上の発言なんて、所詮文字だけだよ。なんだけど、その文字の羅列（られい）に意思があって、すごく私に刺さったの」

そういうと、きらきらした眼で僕を見た。

思わず視線を外すと、そこには自分のスマホがあった。ロック画面を見ると、一四時二〇分。

まずい。今からだとかかなり遅くなる。

「あの、これから人に会わないといけないんです。生命医科学部の人なので……」

そう言っつて席を外そうとすると、

「待って、生命医科学部のなんて人に会いに行くの？」

「えっと、三回生の及川おいかわけいさんです」

「及川何さん？」

「及川けい……？」

僕が言うと、彼女はくすりと笑った。ころころと表情が変わる人だ。

「それね、及川ほたる蛸たこって読むの。蛍光灯の蛸だけだね」

「え？」

女性なの？ なんとなく男だとばかり思っていた。

「はい。それ、私」

及川さんはそう言っつて自分を指さすと、また真正面から僕の眼をのぞき込む。せつかく視線を外せたところだったのに。

「で、君の名前聞いてなかったね」

そう言えば名乗っていなかった。

「菊宮優吾、です」

「ふむ、優吾くんね。あなたの用事を聞かせてくれる？」

会社訪問について一通り説明をする。

聞き終えた及川さんは、ふんふんと頷き、

「じゃあ、明日駅でね」

と、簡単にオッケーをくれた。殴られたおかげだろうか。

その後、用事があるとかで及川さんは足早に去って行った。

僕はと言えば、午後の授業はないので、もう帰っても構わない。でも、念のためと思つて医務室に行った。

「なんですぐ来ない。脳震盪のうしんどうは危険なんだからな。今回は、何事もなかったからよかったようなもので……」

医務室のお兄さんは、やや強い口調で、脳震盪の恐ろしさを教えてくれた。

確かに、今回は運がよかった。

「でも、よかったな。無事で」

「はい、ありがとうございます」

そして、殴られた頬が熱を持つだろうから、と湿布と塗り薬をくれた。

「時間を作って病院にも行った方がいいよ、面倒でも」

お兄さんは、最後までそう言っていて心配してくれていた。

ほんと、喧嘩なんてするもんじゃないよね。

……いや、一方的に殴られただけなんだけど。

そんなことを考えながら帰宅すると、兄さんは何か作業の真っ最中だった。

「おかえり、十社製薬に行ける目処はついた？」

こちらを振り向くこともなく、キーを叩きながら兄さんは言う。

「うん、明日行ってくる」

「ふむ、明日か。じゃあ、間に合いそうだな……」

「そんな急いでたの？」

確かに早いほうがよさそうではあったけど、まさかそれほどは。

「ちよっと、面白い事態になりそうなんですね。こっちのコマは早いうちに揃えておきたいんだ。なので……まあ優吾、しっかり聞いてきてくれ」

「はら」

* * *

十社製薬最寄りの北山駅に到着したのは、待ち合わせの三分前だった。

家からだど、今出川駅から三駅。ちょうどいい時間に着いたな……と思っただけど、改札を出た瞬間、

「おっそーい！ こっちは三〇分前から来てるんだからね。女性を待たすもんじゃな
らよ、優吾くん」

及川さんが僕を指さし、大声でそんなことを言う。

「は、はら」

「何その返事は。まずは『遅れてすみませんでした』とかじゃないの？」

いや、待ち合わせは九時四五分ですよね。まだ九時四三分なので、遅れてはいないんじゃないでしょうか……。

言えなかつたけど。

「さて、じゃあ行くよ。深泥池みどろがけの近くだから、すぐ近くよ」

それは確かに近いよな……って、じゃあ、なんで三〇分も前に着いてたんだらう？

そんなことを考えつつ、及川さんについていく。深泥池の岸では、小さな青い花が沢山咲いている。あれ、名前はなんだっけ？

そんなことを考えているうちに、十社製薬に到着した。本当に近い。

この場所は、以前は公園だったらしい。それを数年前に買い取り、新たに社屋を建て直

した……というのは、ネットで調べた話だ。

——しかし、大きいな。

とはいえ、階数はそれほどでもない。三階建てくらいだ。けれど、とにかく敷地が広大で、外壁が延々と続いている。また、まわりのマンションはもつと奥に引っ込んでいるから、せり出している感じがして、余計に存在感がある。

「何してんの？　まずはOB訪問でしょ？」

及川さんは、ぼんやりしている僕を置き去りにする勢いで歩き出したので、慌てて後に続く。

一階の受付には、誰も人はいなかった。タブレット端末で呼びだす仕組みらしい。

あたりをきよろきよろしていると、

「呼んだわ、もう少しで来るみたい。待ちましょう」

及川さんは、どうも少しせっかちな人みたいだ。

それからすぐに、白衣を着た人が受付に現れた。この人がOBだろうか？

「どーもどーも、君が及川くんか」

白衣の人は、そう言って手を差し出す。

「初めまして」

その手を握り返す及川さん。

「聞ってるよ、かなり優秀なんだって？ 是非うちに来て欲しいもんだねえ」

及川さんの手を握ったまま話し続けて、そこでようやく僕に気づいたらしい。

「君は？」

「あ、菊宮といいます」

名前も名乗ろうとしたところで、遮るように声が重なる。

「あ、名前は知らないよ。男の名前は聞いても忘れるから無駄なんだ。こっちはとこっつていうんで、それで」

——なんだか、かなり強引な感じの人だな……。

そんなことを思っていると、

「とろろさん、菊宮くんも会社見学の一員なんですから、ちゃんとしてください」
とたしなめる及川さん。流石の気の強さだ……。

「すまんすまん。菊宮くん」

とろろさんは一応そう謝り、けれど僕に身体を寄せると、

「あんまし前に出るなよ」

とこっそり耳打ちし、そのまますたすたと歩いて行った。及川さんと二人、追いかけるようにそのあとに続く。

長い廊下を歩き、何人かの社員らしき人たちとすれ違う。

廊下で立ち話をしている人たちもいる。でも、どうやら日本語じゃないみたいだ。

そんなことを気にしていると、及川さんがちょんちょんと僕をこづいて、「すごいね、中国の人みたい。日本人だけでやってるのかと思ってたけど違うんだね」

そのあと、エレベーターで三階へと移動して、応接間のようなところへと通される。

「ちよっと上司を呼んで来るんで、及川くん、待ってて。あ、これ会社資料。あげるから読んでくれれば」

そう言い残して、さっと部屋を出て行く。

二人きりになると、及川さんは低い応接用テーブルに両手をついて「ごめん」のポーズをした。

「え、及川さん、何を」

「ごめん。ごめんね、優吾くん。あんな人とは知らなくて。私も初めてだったから油断したわ。連絡した時は『大丈夫だよ、一人追加するくらい』って言ってたのよ。だから大丈夫だと思ったんだけど……」

たしかに、ところさんの態度はあからさまに違うけど、及川さんのせいでは……。

「いや、気にしないでください」

「そう？ 気を悪くしないでね」

そんなことを話していると、ところさんが戻って来た。

「お待ちせ」

一緒に入ってきたのは、眼鏡をかけた痩せ気味な人。その人は、見渡すと軽く会釈をして、

「沢田です。ここで研究室長をやっています」

上司と言っていたけど、研究室長というのはやっぱり偉いんだろうか。

そんなことを考えていると、いつの間にか沢田さんが目の前に立っていて、僕ら二人にすつと名刺を手渡す。返せる名刺もないんだけど。

「頂戴します。及川蛍と言います」

と、及川さんが言っていたので、僕も真似をする。

「頂戴します。菊宮優吾と言います」

しばらくは沢田さんから会社の紹介があり、兄さんにもらったメモ帳に、丹念にメモを取りながらそれを聞いた。

「じゃあ、君たちから質問あれば。どうぞ」

一通りの話が終わったのか、質問タイムになった。

兄さんに頼まれたことを聞かないといけない。そのためにここに来たんだから。

でも、最初にいきなりだとまずいかも知れない。なので、先ほど廊下で気になったこと

を聞くことにした。

「あの、この会社は中国人も多いんですか？」
すると、ちよつと空気が変わったように感じられた。

「どこからそれを？」

沢田さんが、少し不思議そうに問う。

「いえ、先ほど廊下ですれ違った人が中国語を話していたように思いましたので」
そう答えると、

「そうですか、少なくともはい……という程度にはいます。他には？」
なんだか、スパンと話を切られた気がした。

これ以上突っ込んではいけないのだろうか？

考えていると、次は及川さんが口を開いた。

「最近医薬品の製造開発が、どこも活発に行われていると聞きました。御社も今までのような認可製品の開発だけでなく、新薬の開発にも力をいれていくんでしょうか？ 作るとすれば、いつごろからやっていく、というような目処はあるんでしょうか？」

その質問を受け、沢田さんの表情が、ふつと柔らいだように見えた。

「そういうことは言えないんだ。申し訳ないね」

「そうですか……」

じゃあ、僕の番かな……と思ったところで、沢田さんがすつと立ち上がる。

「君たち、この中はどう見たかい？」

「いや、まだです」

そう及川さんが答えると、

「じゃあ中の見物をしてから、また質問を受け付けよう」

そんなわけで、社内見学もさせてもらえることになった。

* * *

沢田さんの解説付きで、社内の様々な部署を見て回る。

ここが検査班、ここが実験班……解説を聞いて、なるほどとは思うものの、あまりにも分野が違いすぎて、専門用語が理解できない。話の三分の一も頭に入ってこない。

いっぽう、及川さんはしきりに「すごいですね」「こんなところでこういうことが……」と興味深そうな反応をしている。さすがに専門分野だけある。

とりあえず、来たからにはメモをとらないと……と思うものの、専門用語がほとんど英語なので、メモを取るのが間に合わない。頭が混乱する。

「すみません、一息入れさせてもらっていいですか？」

結局、途中でギブアップすることになったのだけど、幸い三〇分ほど休憩しようという

ことになった。

休憩コーナーのようなところに移動し、自販機で缶コーヒーを買う。取り出し口から缶コーヒーを取ろうとしたところで、少し離れたところにいる沢田さんの話し声が聞えてきた。

「お久しぶりです」

「お、沢田さん。一ヶ月不見イーガ ユエイジエン、元気でしたか？」

「はい。リュウさんもお元気そうで。今回はどのような用事で？」

「いつも通りのご機嫌伺いですよ。向こうとこっちを行ったり来たりなので、顔を忘れられないようにしないとね」

リュウ？ 日本人じゃないよな。あと、沢田さんも中国語を喋っていたような？

話が気になったけれど、ずっと屈んで聞き耳を立てているわけにもいかない。立ち上がり、壁際まで行って缶コーヒーを飲む。二人の話は続いている。

「今度来る人、もう会った？」

「いや、リュウさん、それがまだなんですよ。どうも、家の方でトラブルがあったみたいで、もう少し時間かかるとか」

「そうなの？ 家の問題じゃしょうがないね」

「優吾くん、どう？ この会社」

聞き耳を立てていると、すぐそばから及川さんの声が聞え、慌ててしまった。

「あ、そ、そうですわね」

突然のことで言葉が出ない。

「まだちょっとわからないよね……うん」

及川さんには悪いけど、まだ沢田さんの会話を聞いていたのだけ……。

そんなときに、ところさんが沢田さんに声をかける。

「沢田主任、そろそろ続きを」

「そうだな、じゃ、リュウさん。また」

「またね、沢田さん」

その後、また一時間ほど社内を見学し、最初の応接間に戻ってきた。今度は飲み物も出てきた。

座ると少し落ち着いたので、出されたお茶に口をつける。

「それで、及川さん。率直に言っただうでした？」

「えっ？ そうですわね、えーっと……」

このタイミングで聞かれるってことは、会社の印象とかそういうのだよな。

そんなことを思っていたら、

「そっちの彼はどう思った？」

と僕に話が振られた。

「そうですね、活気のあるいいところだと思います」

「はははは、活気がある、か」

「なんだか、的外れなことを言ってしまったのだろうか。」

「すみません、変な感じで……」

「いや、いいと思うよ。率直な感じで。第一印象は悪くなかったってことでいいのかな？」

「はい、そうですね」

「及川君、前後してしまっただけ、どうだい？」

沢田さんは、あくまでも及川さんの印象を聞きたいみたいだ。

「そうですね、なんとか、元気なのはいいですね」

「ははは、なるほど。じゃあ君が来るともって元気になりそうかな？」

ああ、なるほど。沢田さんは及川さんに来て欲しいって感じなのか。

「そうかも知れませんか」

「そういつて及川さんは笑い、その話を終わらせた。本当のところはどうなんだろう。」

「じゃあ、今までのを踏まえて、何か質問とか言いたいこととかあるかな？」

「そう言われたので、軽く手を上げてみる。」

「お。では君、えっと名前は？」

先ほど自己紹介をしたのにな……と思いつつ「菊宮です」と名乗る。

「すまない、物覚えがあまりよくなってね。……続けて」

兄さんの言葉を思い出し、まずは質問をメモ帳に走り書きする。

『人を欲しがってないか、聞いておくこと』

そして、質問の枕に、普通に印象を話した。

「こちらは、中国の人も多いんですね」

「そうかな？　それが質問かい？」

沢田さんの反応はそっけない。まあ、さっきした話と似た内容だったし。

「で、ですね。質問です。あのー、ぶしつけかもしれませんが……」

と前置きした段階で、周りの空気が変わったことに気がつけば、そのあとの言葉は言わなかったに違いない。

「……いい人、欲しくないですか？」

その瞬間、ところさんと沢田さんの表情が一変する。部屋の空気が硬くなった。

沢田さんが、明らかに感情を抑えるような、深いため息をついたあと、

「ふむ。そろそろ時間か。他の者に玄関まで送らせよう」

そう言っただけで沢田さんと、後に続いてところさんも応接室からそそくさと出て行った。その後、すぐさま事務職らしい女性が部屋へとやってきた。

「玄関までご案内します」

僕たちは、機械のように無駄のない動きで、玄関まで送り出されてしまった。

* * *

「な、なに？」

玄関前の道路に出て、金縛りが解けたように及川さんが口を開いた。

「さっきいきなり態度が変わっちゃったけど、なんかあったってこと？」

それは僕も聞きたい。まったく普通の質問だったと思うんだけど……。

「まずいこと、言ったのかなあ」

ぼそっとそう言うと、

「わかんない。わかんないけど……」

そう言って固まられると、なんだか肩身がせまくなる。ミスしたのは僕で、及川さんが悪いわけではないのに。

——って、ミス？ さっきの会話って、ミスなのかな？

また、昔みたいなミスをしたのか……と、落ち込んでいると、

「でも、ここにいてもしょうがないね。私は学校に戻って連絡しないといけないから行くけど、優吾くんはどうする？」

と、少し立ち直りかけた及川さんに促される。

「そうですね。とりあえず今日は学校に報告だけして帰ります」

「じゃあ、一緒にもどろっか」

池のほとりで、小さな青い花をまた見かける。もう、しばみかけている。

そこで、唐突に名前を思い出した。ツクサだ。

「月草の借れる命にある人をいかに知りてか後も逢はむと言ふ」……たっけ。そんな歌が、『万葉集』まんようしゅうにあった。そこで歌われる月草が、このツクサだ。

それにしても、さつきはなんで出てこなかったんだらう。緊張していたのかな……。

駅に戻り、電車に乗り込むまで、会話はなかった。電車が来るまでの数分が、やけに長かった。

ようやく来た電車に乗り込み、ばつが悪い気持ちのまま、隣り合って座る。そこで、ようやく及川さんが口を開いた。

「優吾くん、昨日のことなんだけど……」

「え、また彼が何かしてきましたか？」

すっかり忘れていたけど、僕が殴られたのは昨日のことだった。さつきのミスと、湿布のおかげか腫れも感じなかったので、すっかり忘れていた。

「ううん、そうじゃなくて、その後にした話。手代木さんの話」

「ああ」

兄さん……かもしれない人の話か。

「手代木っていう名前、実はつい最近知ったんだ」

「え？」

「それまではずっと、ネットハンドドルでの名前ネームしか知らなくてね。johandムって名乗ってたの」

それは……たぶん兄さんだ。

「私が中学生とか高校生の頃の話。当時はあまり友達がいなくて、ネットの掲示板ばかり見ていたの」

及川さんが？ ちょっと想像できないけど……。

「何もかもが嫌だな、退屈だな、って思ってた時に、ネットの掲示板でその名前を見たの。johandムって人が、もっともらしいことを言う他の人に対して『本当か？ それは実際にやってみての言葉か？』って、どんどんと別の材料を出して批判していったの……」

ああ、いかにも兄さんが言いそうだ……。

子供の頃、そうやって喧嘩をふっかけるのを何度も見た。

「ある日、『株なんて、会社の情報さえ知ってれば上がる下がるはわかるんだから、インサイダー取引にならない人が勝つ』っていう書き込みを見て、そうだよな。やっぱり情報が

ないと、お金儲けも難しいよねって思ってたの。そんなところに johand が出てきたの」
ん？ 今だと、「情報は何よりも大切だからきっちりしないと」って言いそうな……。

今日だって、きちんと情報を取れって意味で「情報収集だよ」って言ってたわけだし。
「それでね、『確かに情報は大事だ。だが、その一時情報を知っている周りの人だけ、その
範囲の人だけが儲けられるってわけじゃない』って言って、ターゲットの会社の株価しか
見ていなかったネットの人たちに、子会社や関連会社で儲けを出せるって数字を出してき
たの」

ああ、やっぱり兄さんかも。説明不足っぷりといひ……。

「方法が面白くてね。ネットでは、その会社が新製品を発表したから、先にその株を買
ってた人はいいよねって論調だったのに、『間に合うよ』って言い出して、いろんなメーカ
ーの一覧を出してきたの。その中から、『俺ならこの会社とこの会社の株を買おうし、今買っ
た』って証拠写真真まで上げて。そうしたら、一週間後にその株価が一・七倍になって、
新製品を発表した会社の株価が三〇%ほど下がったの。これ、なんでだと思う？」

「なんでですか？」

なんとなく、ここまできたらちゃんと聞こうという気分になっていた。

「新製品のパーツの O E M 元が、johand が買ったところだったの。そして新製品発表の直
後に、O E M 元を買取したの。だから株価が上がったってわけ。johand が言うには、から

くりや裏の動きなんかも含めて『情報』っていうんだ、と」

そこで及川さんはひと呼吸入れる。

「すごいって思ったの。当時の私は今よりもレベルが低かったから。それから、Johandのことをずっと見てたの。ネットでしか知らないから、文字通り『文字を見てた』って感じ。でもいつの間にかいなくなっていて、でも会ってみたくて。そうしたらJohandが『手代木』って人じゃないかって話が出てきて、それで……」

「他の人に調査してもらった……ってことですか？」

「そう。興信所とか探偵とかだと、多分一発でわかるんだらうけどね。そこまでのお金はなかったから、友人知人、学校の人なんかで、だけどね」

「ネットの人だったら、ネットで聞けばわかるんじゃないですか？」

及川さんは、首を横に振る。

「そう思っていたんだけど、ここ数年、Johandの足取りがぱったりと消えちゃって。わっかんないんだ」

どこかを見上げるようにして、話を続ける。

「ネットっていつでも書けるんだけど、それはいつでも書かないでもいられる、ってことなんだよね。書かなければ、その人にたどり着けなくなっちゃうの」

数年。

そうか、確かに兄さんはここ数年いなかっただから。

「今出川ー今出川ー」

電車のアナウンスで、最寄り駅に着いたことを知る。

「先輩、着きましたけど」

僕のキャンパスはここだけど、及川さんのキャンパスはずっと南だったはず。

「うん、今日は向こうに行つて報告してくるから、もうちょっと乗ってるね。菊宮くん、今日はお疲れさま。またね」

「はい。また」

また、があるかどうか、ちょっと不明ではあるけど……。

及川さんに乗せた車両を見送つてから、僕は大学に向かった。

学生課に着く頃には、もう夕刻……と言える時間帯も終わりにかけていた。そのせいで、職員の人たちも数が少ない。

「すみません、昨日相談させていただいた菊宮ですけど、就職課の方おられませんか？」
ほどなく、昨日会った人が奥の本棚あたりから出てきた。

「どうも、菊宮です。おかげさまで、無事に及川さんと会社訪問をしてきました」
そう言うと、少し意外そうな顔で、

「へー、行つたんだ。文学部なの？」

「は？」

「どうでした？ 上手くやれそう？」

「いえ、そんな感じではなかったです。僕にはちよつと……」

「そう。でも、まだ一回生でしょ？ まだまだ、いろいろあるから」

元から十社製薬に入りたいと思つてたわけじゃないけど、こんな風に言われると、少しばかり惨めだった。

* * *

途中で終わりにされてしまった感じだったので、帰り道はどうも気が重かった。

いつもなら夕ご飯用の買い物をするタイミングなのに、そこまで気が回っておらず、そのことを思い出したのは玄関のドアを開けた瞬間だった。

やっぱり動揺しているんだろうか。でも、まずは兄さんに報告しないと。買い物はあとでもできる。

部屋に入ると、相変わらずキーボードの音が響いていた。

「兄さん、ただいま」

挨拶をするも、それ以上の言葉が中々出てこない。

「あ、あの……」

言いださないうちに、兄さんが珍しいことを口にする。

「優吾、外で食べないか？ たまにはいいだろう」

そう言うのと、さっと上着を羽織り、僕の横をすり抜けて玄關へと向かう。

「どうした？ 玄關で待つてるから手早く用意しなさい」

そう言われ、慌てて自分の荷物を部屋へと運ぶ。

会社の資料（及川さんから貰った）とメモ帳だけあればいいだろう。小さい手提げに
れて、他の荷物は全部置いていく。

「中華でいいよな？」

そう言うのと、兄さんは先に立ってどんどん歩いて行く。

着いたのは、前を通ったことはあるけど、まだ入ったことはないお店だった。「えんえん」って読むのだろうか。

兄さんは店に入るなり、「適当に座るよ」と声をかける。店の人も「あいよー」と気にしていない様子だ。

夕飯の時間帯だけど、店内は案外空いている。

「まあ、何を食べても美味いけど、俺はチャーハンが好きなので頼む。優吾はどうする？」
席に座り、メニューを貰ったところだったので、焦って壁に貼ってあるメニューも見回す。ほどなくして、

「決まったか？ 呼ぶぞ」

兄さんは、早々と自分の注文を決めてしまっていたらしい。

「あ、じゃあ、とびっこ海鮮チャーハンで」

僕がそう言うと、それに重ねて、

「それを二つと、ハイコーダ回鍋肉と水餃子。あと、温かいウーロン茶も」

「はい」

飲み物が先に出てきた。兄さんはお茶を一口飲んで、口を開いた。

「で、どうだった？」

いたたまれなくなつた僕は、素直に謝ることにした。

「すみません。なんか、向こうの会社の人を怒らせてしまつて……」

「ふうん、なんで？」

「兄さんに言われた通りの質問したら、その途端に怒つてしまつたみたいで」

「言われた通り……ね」

兄さんはテーブルに肘をついた。

「メモ、あるよね。見せて」

「は」

差し出すと兄さんはメモをめくりながら、なにやらつぶやいている。けれど、店の喧騒

のおかげでほとんど聞き取れなかった。

「優吾、メモには『人を欲しがってないか、聞いておくこと』ってあるんだけど、その後なんて言ってた？」

兄さんがメモを見せながら言う。

「えっと……」

記憶を反芻はんすうしながら、ありのままの状況を伝える。

僕が、「いい人、欲しくくないですか？」と言ったら、「ふむ、そろそろ時間か。他の者に玄関まで送らせよう」と……。

「ん？ その前の会話が大事だな。その前、優吾ないし相手の人はなんと書いていたんだ？ 丁度このメモの前か、その直後だ」

その前は、どうだったかな？ そうそう。僕が、「こちらは、中国の人も多いんですね」と言うと、「そうかな？ それが質問かい？」と返されたので……。

「そうか。ふむ。そうか」

兄さんは下を向いて、何やらまたぶつぶつ言いはじめた。

僕が間違えたせいで、兄さんの計画が狂ったんだろうか。

「何してる、さっさと喰おう」

いつの間にか、テーブルには料理が並んでいた。

「……あ、はい。いただきます」

チャーハンや料理は美味しかったんだけど、でも、兄さんの反応が気掛かりで、なんとなく自分が食べているような気分がしなかった。

家に帰ってから、兄さんは特に何も言わなかった。ちゃんと謝っていないことに気づいたのは、自室に戻ってからだった。

僕は頼まれたことすらもできないのか。ただ聞いて、返事を貰うことさえできないのか。ベッドに入ってから、ずっとそのことで眠れず、悶々としていた。

何時間経ったのか、ふと気がつくと、窓からは明るい日差しが差し込んでいる。いつの間にか、朝が来ていた。

* * *

まずは、兄さんに謝らないといけない。起き出してきた兄さんに、

「兄さん、昨日はすみませんでした。ただ聞いてくるだけなのに、できなくて……」

けれど兄さんは、僕の謝罪を手で遮って、

「そういうのはいいらない」

「え」

「おまえは、今日は学校に行きな」

と、冷たかった。

——怒ってるなあ。こんなことならさっさと謝るべきだった……。

気分ががっくりと落ち込んでいる中、それでも食事の片づけをする。きっと学校へ行っても、講義なんて耳に入らないだろう。でも、行かないと……と、ドアを開けようとしたところで、兄さんに呼び止められた。

「優吾、怒ってるとかそういうんじゃないから気にするな。じゃあ、いつてらっしゃい」
一言だけだったけど、その言葉で僕は少し救われた。

けれども、同時に自己嫌悪も襲ってくる。

——次は、ちゃんと言われたことはしないと……。

続きは書籍版でお楽しみください。

[『手のひらの露』作品ページはこちら](#)